

《平成24年度 事業報告》

1. 相談概要

(1) 相談件数

○実支援人数 892 人 → 前年度より 21.4%増(H23 年度 702 人)

○延支援件数 3,937 件 → 前年度より 23.4%増(H23 年度 3,018 件)

(2) 相談支援状況

相談支援は日常生活(コミュニケーション、行動上のこと、学校や所属機関でのこと等)の様々な相談に応じている。

相談数(延支援件数)は H23 年度より 18.8%増加した。18 歳以上が全体の 65.5%と半数以上を占めている(資料 1-①)。

障害種別では不明(未診断)が多く、発達障害を疑っている方が大半を占めている。このような方に対しては医療機関の受診を勧めるが、本人に受診の意思がない場合の具体的な対応方法などの相談も多く含まれている。

相談者は家族、本人が多く、家族は家庭での対応方法についての相談が中心である。本人はカウンセリング的な要素の強いものが多い。ひきこもり状態の方も多く、有効とされるアウトリーチ型支援を展開している社会資源が少ない状況もあるため、支援がなかなか進まない現状にある。

(3) 発達支援状況

所属機関(保育所、幼稚園、学校、福祉施設、医療機関等)において、本人や家族が安心して過ごせるために連携・協働し、継続的な支援を行っている。相談数(延支援件数)は H23 年度より 32.8%増加した(資料 1-①)。

主な内容はペアレント・トレーニング等の手法を援用しながら、特性の理解や具体的な対応方法などを所属機関、家族と共に考えていく支援を行っている。

(4) 就労支援状況

就労やその準備について、職場等の関係機関と連携して支援を行っている。相談数(延支援件数)は H23 年度より 30.7%増加した。就労者数は 27 人(内、障害者雇用枠 22 人)。就業先は事務、軽作業、清掃、介護、接客等である。

障害種別は、アスペルガー症候群 67%、広汎性発達障害 16.5%、その他 16.5%の順となっている(資料 1-①)

主な相談内容は、大学卒業を控えての就職活動、一般就労を経て初めて障害者雇用枠で再就職を目指す場合や一般枠就職活動等、様々である。また、就労後の定着を視野に職場内外での精神面の安定を図っていくことも重要であり、本人への継続的なフォローを実施している。

その他、ハローワーク、千葉障害者職業センター、千葉県立障害者高等技術専門校、千葉就業支援キャリアセンター、就労移行支援事業所、企業等と連携するなど、他機関と協同で取り組むことが増加してきている。

(5) 機関支援

機関支援の一環として、年中児集団行動観察を新規事業として実施(後述)。

対象機関は発達支援では幼稚園が多く、発達障害やその他の障害等が疑われる児への対応方法の助言が中心である。

就労支援では企業が多く、障害特性の理解や対応方法の助言が中心である。障害者雇用だけでなく、一般雇用で働いている発達障害と思われる社員への対応方法の助言も行っている。

(6) 普及啓発

発達障害の理解と支援についての普及啓発を図るため、主催・共催による講演会を実施。基礎的な発達障害の理解だけではなく、具体的な対応法の講演会を希望する声も多くなっている。

関係機関が開催する勉強会等への講師派遣も実施。派遣先の関係機関との連携はより強固となり、顔の見える連携の確立にもつながっている。

また、世界自閉症啓発デーに伴う各種イベントを、千葉県発達障害者支援センター及び千葉県自閉症協会と共同で開催した。

(7) サロン

活動を通じて仲間を見つけることや、自分を表現する力と他の人を理解する力の向上を目的として実施。18歳以上で発達障害と診断されている方を対象としている。参加人数は4～12人と回毎にばらつきがあった。原則、個別相談を継続している方へ参加を呼びかけ、相談時にサロンのフィードバックも行っている。

2. 新規事業

(1) 年中児集団行動観察

乳幼児健診では発見しづらい発達特性や虐待などの不適切な環境は、集団行動を契に生活困難の原因となると考えられている。そのため、子どもの行動から困難の原因となる発達特性や不適切な環境を理解し、適切に子どもを支援する必要がある。

本事業は、集団場面での子どもの行動を観察し、気になる行動の原因を探索、支援を考えることによって、園職員の行動理解と支援技術を促進し、地域での支援機能の向上を目指すことを目的としている。

【実施園】

・5区(美浜、中央、若葉、花見川、稲毛)6園

【内 容】

- ・保護者への事前説明: 文書による趣旨説明。
- ・保護者への事前調査: ご家庭で困っていること、気になることの確認。
- ・集団場面での行動観察: 幼稚園での集団活動場面の様子を観察。
- ・職員と意見交換: 気になる子への対応方法などを協議。
- ・保護者への報告: 各児への所見を支援センターで作成。園から報告。
- ・保護者、各園職員へアンケート

【協力関係機関】

・養護教育センター ・健康支援課 ・各区保健福祉センター
・千葉大学教育学部 ・千葉市桜木園

【実施結果】

	人数	障害の診断あり※1	相談機関等を勧める※2	対応方法アドバイス※3
若葉区 A 園	20 名	0 名	0 名	20 名
美浜区 B 園	48 名	2 名	3 名	18 名
稲毛区 C 園	32 名	2 名	5 名	16 名
中央区 D 園	81 名	2 名	1 名	31 名
花見川区 E 園	22 名	1 名	0 名	11 名
中央区 F 園	33 名	4 名	4 名	22 名

※1「障害の診断あり」は、疑いも含む。

※2「相談機関等を勧める」は、相談継続中の場合は除く。

現時点での勧めではなく、経過観察後の様子によって勧める場合も含む。

※3「対応方法アドバイス」は、子育て全般に関しても行っている。

【考 察】

各園に障害（発達障害・その他の障害含む）が疑われる児童や育ちにくさを抱えていると思われる児童が見受けられた。園生活での対応方法や家族との関わり方などについての意見交換は、教諭より参考になったとの感想が多数であった。保護者への報告は支援センターで書面を作成したが、伝え方は各園の方針に一任している。

この事業を通して家族や子どもに関わる全ての職種が発達特性や障害特性等を正しく理解し、適切な支援を行っていけるよう啓発していくことは支援センターの重要な役割である。各関係機関の協力が得られたことは、地域の支援力向上や連携の強化の一助にもなっていると思われる。

年間に実施できる回数は限られてしまうため、関係機関との協力体制をさらに強め、広く行っていけるような方法を模索していく必要がある。

（2）ペアレント・トレーニング

発達障害児はその特性から叱責されることが多く、自信や意欲を失ってしまうことがある。ペアレント・トレーニングは発達障害のある子どもの行動を理解し、行動療法に基づく効果的な対処法を体験的に学び、よりよい親子関係づくりと子どもの適応行動の増加を目的としている。

【参加者】

・ADHD と診断された子どもの保護者 6 名（幼稚園児 1 名、小学生 5 名）

【内 容】

セッション1	オリエンテーション 子どもの行動を3種類に分けてみよう
セッション2	肯定的な注目を与えよう ほめ方のコツ スペシャルタイム
セッション3	好ましくない行動を減らす①ー上手な無視の仕方ー
セッション4	好ましくない行動を減らす②ー無視とほめるの組合せー
セッション5	子どもの協力を増やす方法①ー効果的な指示の出し方①ー
セッション6	子どもの協力を増やす方法②ー効果的な指示の出し方②ー
セッション7	子どもの協力を増やす方法③ーよりよい行動のためのチャートー
セッション8	制限を設けるー警告とペナルティーの与え方ー
セッション9	学校・園との連携
セッション 10	これまでのふりかえり

【考 察】

終了後の感想では「具体的な方法が学べてよかった」「子どもへの関わり方を見直せた」など肯定的な意見が多く、トレーニングの効果は期待できる。

小グループでのセッションが基本であり参加人数に限られる。そのため支援センターのみの実施では潜在的ニーズに対応しきれない。広く普及させていくためには、今後、どのように展開していくかの課題は残る。

(3) 社会資源調査

千葉市内の医療機関及び相談機関等の支援状況をアンケート方式で調査。発達障害支援の情報を集約し、各機関と有機的なネットワークを構築することを目的としている。

【対象機関】

- ・医療機関：196件（精神科、心療内科、小児科）
- ・相談機関等：61件

【内 容】

- ・医療機関：発達障害の診断、治療の状況
- ・相談機関等：発達障害の相談、支援の状況

【回答数】

- ・医療機関：41件（回収率20.9%）
- ・相談機関等：35件（回収率57.4%）

【考 察】

回答のあった機関には調査結果を報告。各機関との連携を密にし、発達障害支援の充実を図っていくことが必要である。